

目的 被服材料として用いられている各繊維は、まず、その組成によって分類され、つぎに、製造法によって再生、合成繊維などのように中分類され、さらに、天然繊維と化学繊維に大分類されている。このように各繊維は、学術的には明確に分類されているが、一般消費者は繊維の組成や製造法によって繊維を識別し、分類しているのではなく、イメージで捉えている場合が多い。ここでは、被服材料として用いられている各繊維のイメージを測定し、そのイメージによって繊維を分類して上述の学術的分類と比較検討した。

方法 被服材料として用いられている綿、麻、毛、絹、レーヨン、アセテート、ナイロン、ポリエステル、アクリル、ビニロンの10種の繊維を選び、2つずつの繊維の相違度を「非常によく似ている」から「非常に異質である」までの6段階で評定（評定不可能の場合は記入しないように教示）した。この評定平均値を用いて距離行列を作成し、これをインプットデータとして多次元尺度分析を行った。

結果 多次元尺度分析における適合度の指標とされているKruskalのStressは、2次元では0.15、3次元では0.10となった。2次元の0.15は満足すべき値ではないが、対象としている繊維の数が少ない(10)ので、2次元とした。この2次元上に各繊維をプロットしたところ、「ナイロン、ビニロン、ポリエステル、レーヨン、アセテート」、「綿、麻、絹」、が近接して布置され、「毛」は他の繊維とは離れたところにプロットされ、アクリルは合成繊維群と毛の中間に布置された。女子学生の各種繊維に対する認知は天然繊維と合成繊維の区別だけが顕著であることがわかった。